

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2170400606	
法人名	特定非営利活動法人 幸の里	
事業所名	NPO法人 グループホーム 幸の里	
所在地	岐阜県羽島市中下町城屋敷597-1	
自己評価作成日	平成24年11月20日	評価結果市町村受理日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/21/index.php?action_kouhou_detail_2014_022_kani=true&jiyosyoCd=2170400606-00&PrefCd=21&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 中部社会福祉第三者評価センター	
所在地	岐阜県関市市市賀大知洞566-1	
訪問調査日	平成25年 1月 2日	

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

羽島市の農村地帯に当『グループホーム幸の里』はあり、過っての集落共同体が残存する地域でまさに地域密着型の施設です。開設当初より、地域の方々の支援、協力を受け今日に至っています。ホームは築140年の古民家を改築、居室を日本間で増築し、施設感はなく、利用者がわが家として暮らせる環境を提供しております。職員は精神科勤務経験者のベテラン看護師4名、薬剤師1名、介護支援専門員2名、精神保健福祉士1名、認知症ケア専門士1名、介護福祉士1名等々を迎え、医療系のケアを提供する施設として7年が経過しました。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の「駆け込み寺」的な存在となっており、地域住民が困りごとの相談に訪れる。ホームで餅つきを行えば、近隣にお餅を配り、敬老の日には、地域の80歳以上のお年寄り8名を訪問して「特別料理」を配った。地域の農家からは、採れたて野菜のおすそ分けが届く。医療的な介護を得意とするホームであり、職員には看護師資格を有する者も多い。そのような中で、フィリピン国籍を有する女性職員2名が介護スタッフとして活躍している。日本語が苦手な彼女たちのために、記録の書式を変更するなどの工夫もある。彼女たちの労に報いるために、管理者は職員の慰安旅行としてフィリピン旅行を計画している。幾組かに分散して全職員が海外へ飛び立つが、2名にとっては久しぶりの里帰りとなる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	『大家族』を理念に掲げ、利用者と職員の壁を無くし、『うちのばあちゃん。うちのじいちゃん』の関係で介護をしている。利用者が亡くなると本当の家族より、職員の方が堪え、しばらく入居を控える状態であるので十分理解できている	基本理念は「大家族」であり、1年に1度は、この大家族全員が一泊旅行を楽しむ。家族や地域の民生委員が応援に駆けつけることもある。今年は屋神温泉に行った。来春の琵琶湖が楽しみである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	この地域は村落共同体が残存しているところで開設当初より、多種多様の支援を受けている。一例のして、利用者が亡くなり、村の寺で葬儀を行った時、地域住民の参列を受けた。	“駆け込み寺”的な要素もあり、地域住民が困りごとの相談に訪れる等、地域の社会資源として重要な役割を担っている。お餅をついて地域に配ったり、おすそ分けをもらったりの関係もある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	通所を開設し、認知症相談ばかりでなく、病状把握して専門医紹介、投薬管理等を行ってきた。また、敬老の日は一緒に敬老弁当を配布し日頃の感謝の気持ちを表してきた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	認知症をより理解してもらい、認知症を明るいイメージで捉えてもらい、楽しめる認知症にしようと奮闘中	運営推進会議の開催回数が徐々に増えてきて、今年度は4回の開催である。会議では、活動状況の報告を中心に、参加メンバーによる意見交換が行われている。	来年度(平成25年度)からは、外部評価の主管部署が、県から市に移行する。運営推進会議の扱い等、市・担当課との十分な摺合せが望まれる。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	羽島市の困難事例のみならず、他町村の困難事例にも関与させてもらっている。	ホームには看護師資格を持った職員が多く、医療面でのケアに優れていることから、他市町村からの困難事例を受け入れることも度々である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	開設当初より、玄関等の施錠はしたことがない。居心地が良ければ、誰も出て行かないので居心地の良い場を作ることになってきた。又、自傷行為のみ、行動制限を行ったが、最近はこちらもクリア出来た。	玄関は施錠されておらず、いつ行っても自由に出入りができる。飼いだ3匹が敷地外に出ないようにフェンスがめぐらされているが、その扉も手で自由に開けることが可能である。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	『病気のなせる事はすべて許す』ことを理解し、敬語を必要以上に使わず、利用者や職員の壁を無くし、言いたい事をお互いに言い、ストレスの溜めないよう指導してきた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	精神保健福祉士、精神科勤務経験者5名居り、又、研修にも参加してもらい、いつでも対応できる状態であるが、今だ、権利擁護、成年後見制度の事例が無い。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時ケアに対する考え方、取り組みに対して説明し、その後の状態変化に応じて再度説明し、理解してもらっている。どちらかと言うと、お任せ状態になっているのが課題。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議は利用者、利用者家族も参加してもらい、要望、意見を表せる機会を作っているが、当施設は言いたい放題言うのが特徴で日頃から要望が出た都度、満たせる要望は満たしてきた。	家族アンケートには感謝の言葉が多いが、医療的なケアの充実を裏付けるかのように、「家にいた時よりも健康になった」との回答が複数あった。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	介護、看護には『阿吽の呼吸』が不可欠で職員の気心をお互いに理解し合うよう、ミーティング、食事会、慰安旅行等を行っている。しかし、基礎の力不足が分かり、勉強会を行う事とした。	外国人職員2名のために、記録様式の変更を繰り返している。彼女たちの労に報いるため、里帰りのフィリピン旅行が実施される。何組かに分けて、全ての職員が旅行に参加する。	知識、技術等、あらゆる面で管理者と他の職員との個人差が目につく。OJTだけに頼らず、基礎的な研修(座学)にも力を入れてほしい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	1ユニットの施設で職員も少ないが、キャリアパスを導入し、各自が向上心を持てるようにした。又、資格取得、研修、看護学校通学等に努められるよう配慮、支援、奨学も行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	上記に記した様に向上心のある職員には全面的に支援している。尚、県内の研修より、国内の研修特に関東の研修に対して力を入れている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	羽島市にグループホームの勉強会、羽島市民病院の勉強会等が立ち上がり、これに参加させて頂き、交流を図っているが、視点としては全国的なところにある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所直後は本人の赴くままの生活をしてもらい、その言動を観察、症状、パーソナリティーを把握後、信頼関係構築手法を取っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記の手法で利用者が落ち着きを取り戻すと、家族の表情も柔らかくなる。それが家族との信頼関係構築に大きな要因となっている。又、些細な事でも家族に連絡し、いつも利用者の状態が分かる様にしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当施設は困難事例が多く、急性期対応を藤田保健衛生大学病院、黒野病院の認知症専門医と密なる医療連携を取って居る事と、精神科勤務看護師を交えて、その時々々のケアに努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	敬語使用を強要せず、極々普通の家庭内の会話語で対応し、肩に力を入らない生活、又、職員と利用者との壁は無く、対等の立場で言いたい放題言うのが当施設のスタイルである。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	一つ屋根の下で寝起きし、同じ釜の飯を食べ、喜怒哀楽を共にする家族である。むしろ、本当の家族の方に距離が生じている。一例として、ターミナルを家族は受け入れられるが、職員はなかなか受け入れられない点がある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や近隣の人の訪問を受け入れているが、長い入居者はどうしても馴染みの人との関係は途切れ、施設近隣の人が馴染みの人となっている。	昨年に引き続き、今年も利用者の入れ替わりが激しかった。ホーム近隣からの利用者には、友人等の来客があるが、新しい利用者については「馴染みの関係」を調査中である。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	社会性を維持する為、利用者同士でワイワイやってもらい、問題が生じた時間与することになっている。利用者の社会性は保たれており、来訪者にもしっかりと社会性を発揮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ここが当施設の特徴で入所を問わず、相談に応じ、病院、施設の紹介等を行い、現在どのような状態かも把握して居り、必要に応じて再度の入所も受け入れている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個別ケアをモットーとしているが、9名の共同生活であり、最小限必要なルールは守ってもらっている。それ以外は自由奔放に過ごしてもらっている。	ホーム内には自由な空気が流れており、利用者は思いのままに暮らしている。重度化している利用者(骨折、寝たきり)もあり、口では思いや意向を表出できない利用者が多い。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	精神科勤務30年ばかりのスタッフで日常会話や言動で本人の気づいていない(深層心理)まで把握できるが、次世代に伝授するよう奮闘中		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	24時間生活を共にして居り、身体、心理状態まで把握できている。『何で分かるの』と利用者が言うほどであるので、先手を打つ事もある。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	その日その日、その時間その時間の身体、心理状態は変化し、それに則したケアを行う為、その都度家族に連絡を取っている。それを介護計画に落とすのは難しい。これを介護計画に入れていたら、その間に転倒者が続発するだろう。	現場の介護が優先されており、介護計画との連動は完全ではない。介護計画の内容(目標)は、ADL中心(ケア・マネジメント)で、医療分野の支援もある。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別介護日誌に時系列に食事量、水分量、排泄等身体状況、心理状況も記載し、特記事項は赤で記載し、ケアプラン作成時拾い揚げている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	介護保険制度の言うグループホームの枠は開設当初から無く、『自分の家族ならどうする』の視点からケアを行ってきた。通院介助あり、入院時の洗濯あり、葬儀あり、法要あり、衣類の補充あり等々。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	当施設は村落共同体が残存している施設で地域住民からの差し入れ、いも掘り、栗拾い、等々の支援を受け、職員も地域住民が多く、利用者も地域住民として受け入れられて居り、『安気なところ』と言う。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	24時間の医療連携体制が出来て居り、利用者にとっては『馴染みの先生』となっている。尚、本年初め入院施設も開設され、利用者にとって気軽に入院治療が受けられるようになった。例えば、1日入院等。	かかりつけ医は、利用者全員がホーム提携医を使っている。ただし、認知症に関する部分については、管理者が信頼する専門性の高い県外の医療機関で受診することもまれではない。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	精神科勤務20年以上の看護師4名、5分以内で駆け付けられる看護師1名を有しており、日常の健康管理のみならず、メンタルケアにたいしても充実している。又、職員も日常的に看護師の指導を受けられる体制を整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	藤田保健衛生大学病院、黒野病院、羽島クリニック等医療機関には看護師、ベテラン職員が同行し、同じ医療関係者としての扱いを受けており、入退院に関わらず、情報交換、相談、要望にいたるまでの信頼関係を構築した。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時、家族よりターミナルに対する意見、希望を聞き、その後、信頼関係が構築されてから本人にも聞き、大まかな方向づけをする。ターミナルに入った時、医師、家族、と話し合い、方針を決め、その後は詳細に報告し、意思の疎通を図っている。	ホームでの看取りを希望する利用者・家族が多く、これまでも終末期のケアに力を入れてきた。管理者を筆頭に、看護師資格を持った職員が多く、家族からの信頼も厚い。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	看護師の指導の下、応急処置、初期対応を勤務1年未満の職員を除いて、全員、身につけている。尚、症例毎に理論的に説明し、トータル的に対応できるよう指導している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	日課の散歩が功をなし、避難時間短縮。また、スクリーン設置、掃き出し窓に改築工事し、どこからでも避難出来、近隣の方の協力も得られる体制を整えている。	スプリンクラーが設置され、居室の窓を掃出し窓に改装したため、木造建築ではあるが安全面での不安は大きく解消された。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	敬語を奨励していないので一見、人格の尊重が侵されているかの如く取られやすいが、仲間意識と連帯感が形成され、大家族となっている。入所当初は敬語を使い、信頼関係が形成されつつある中で普通会話語と切り替えている。	訪問調査日は1月2日。利用者にとっても、「お正月」は特別の日である。管理者が何日も費やして作った数十種類の「おせち」が、「大家族」のメンバーに振る舞われていた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	当施設は言いたい放題にしているので、気軽に要望を出すし、遠慮がちの人は他の人が言うてくる。又、入浴日以外の朝、今日どうしたいか聴いて、その日のスケジュールとしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるが、それ以外は自由にしているが、『寝とりたい』が殆んどの人の希望。この希望は時々叶える事になっている。施設側の都合なく、利用者にとって利益で有れば強要する場合もある。リハビリがその例。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしい身だしなみやおしゃれを支援しているつもりだが、ちょっとした隙に外に出せない状態になる人もあって、困っている。概ね、それらしい身だしなみでいると思う。今年おしゃれ会を行った。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	当施設は介護度の高い人が多く、基本的に出来ない。しかし、一人介護度の低い人が居て、家事一般をしてもらい、報酬も出している。嚥下機能低下の人多く、難しい点が多い。楽しみにしているものの、満足しているかは疑問。	調査日がお正月だったこともあり、食卓には「おせち料理」がきれいに並んでいた。管理者が寝る暇も惜しんで、3日ばかりで作った見事な作品である。当然のことではあるが、調査員2名もご相伴に預かった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量、排泄量を計量し、不足があれば、その都度補うようにして居り、健康管理は出来ている。又、一食10品目を基準とした食事提供は守っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは欠かさず行っている。自立している人も確認を取っている。又、朝日歯科大HPの指示の下、残歯ケアにも努めているが、嚥下不能の人のケアが今一つで、訪問歯科も検討中。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間の転倒防止の為、各部屋にポータブルを設置して居り、各自の排泄パターンに合わせた排泄誘導を行っている為、おむつ等の使用量は減少している。	骨折して寝たきりとなった利用者が、ベッドでの生活を余儀なくされていたが、「導尿」の仕組みを丁寧に説明して理解させ、安心した排泄を支援していた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	夜間、水分摂取を行っており、拒否者1名において便秘者はいない。又、野菜中心のメニューで植物繊維摂取に心がけている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的に一日おきの入浴。入浴には危険が伴い、課題のような入浴方法は一般家庭でもなされていない。今後も行わない方針。入浴を楽しむ為に温泉に行っている。	「利用者が喜んでくれる」との理由から、毎年1泊旅行を実施している。旅先の温泉では、入浴と食事が利用者にとっての一番の楽しみである。今年は昼神温泉、来年は琵琶湖で“湯”に浸かる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	散歩、ラジオ体操等で生活リズムを築いている。冬季は入床時寝つきの良いように布団を温める等工夫しているが、それでも眠れない人に対して眠剤を使用しているが、1名のみ。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤師、看護師を有しており、薬剤の目的、副作用等は理解している。服薬に対しては全介助で口の中に入れ、飲み込むまで確認を取っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	お仏飯を供える人、食事を知らせる人、配膳をする人等々個々の力に合わせた仕事を担ってもらい、『大家族』の一員としての役割と自負を保ってもらっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	当施設は外へ外へと言う方針で有る為、日課の散歩、コーヒータイム、外食、一泊旅行、通院、等々外出には事欠かない。	5名の利用者が、近くの神社に初もうでに出かけた。毎日の散歩が日課となっており、大家族が集団で外出することもまれではない。ホームを施設し、利用者・職員全員に加え、飼い犬や猫までも帯同する。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	原則として金銭は持つてもらわない事としている。取られ妄想でトラブル事と、この時代の人は儉しく生活してきたので、金銭を気にして食事を十分取らない、衣服もボロボロを着ている等弊害が多かった事から。金銭感覚は別方法で補っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	自由に電話は出来、手紙のやり取りも自由であるが出来る人は少なく、全面的な支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	古民家改造型の施設で『自分の家』と間違えている人が大多数。和室で障子、畳、御簾戸、仏壇等々。居心地の良い空間は提供出来ており、又、転倒時のリスクも少ないが掃除、消毒が大変。	玄関を入った土間に、大きな石油ストーブが置いてあり、ホーム内は春のように暖かい。飼犬や猫も「大家族」の一員であり、ホーム内を我が物顔で歩き回っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	籐椅子で利用者同士でお喋りをしながら、犬、猫と遊んでいる。又、玄関先のベンチ、ウッドデッキで日向ぼっこも楽しんでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	籐の椅子、筆筒を各自室に配置し、暖かみと安全に配慮し、障子、御簾戸、板天井、腰板等で落ち着いた雰囲気を作り、個性のある自室となっている。	居室は全室和室であり、入り口はすだれで仕切られている。窓が掃出しに改装され、安全面での効果は大きい。掃出し窓の内側には障子をはめられ、落ち着いた雰囲気を醸し出している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の状態に合わせて、手すりやポーター等を置き、安全確保、自立に配慮している。又、着物地で出来たのれんを目印にしている。		